其名も高橋
毒婦の故傳
東京奇聞
芳川俊雄閲
岡本勘造綴
櫻齋房種畫
五編上
五編中
五編下
島鮮堂壽梓

其名も高橋
毒婦の放傳
東京奇聞
芳川俊雄閲
五編上
島鮮堂壽樺

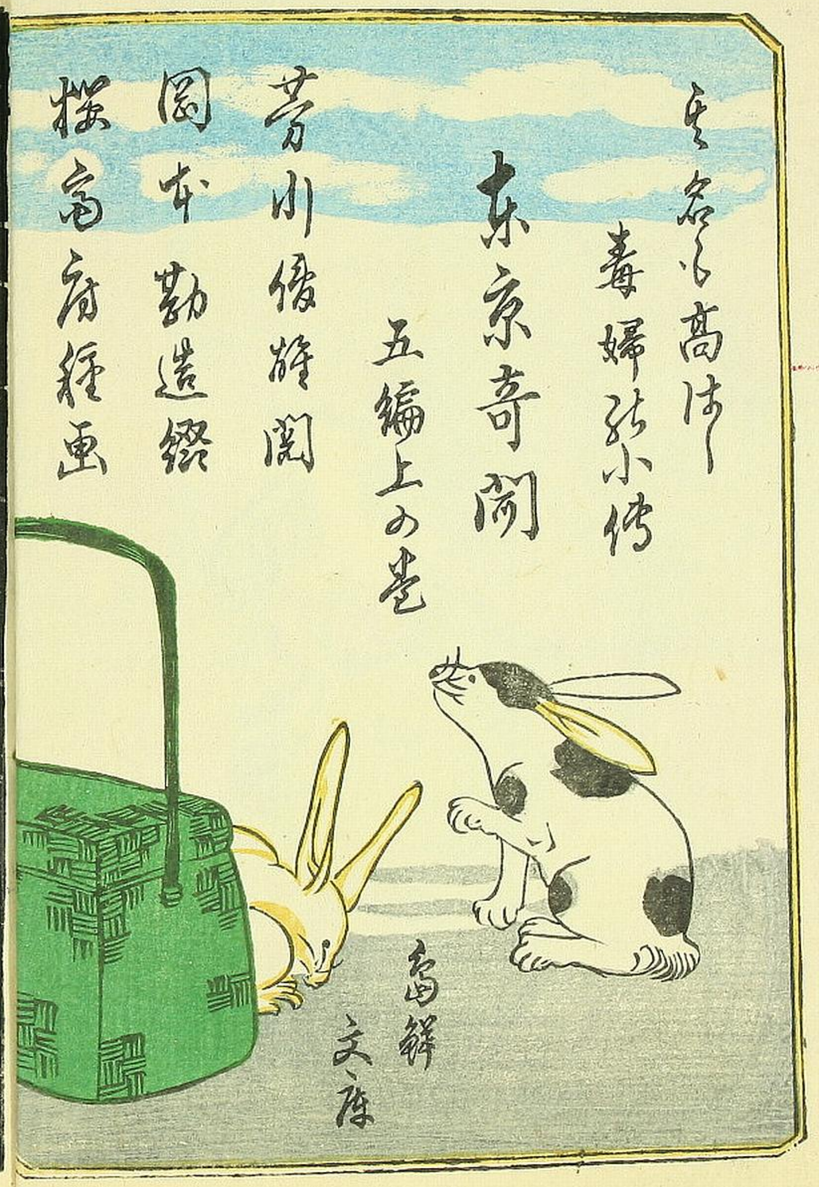
A464
13

毒婦伝小傳

東京奇聞

五編上の巻

芳川俊雄閲
岡本勘造編
桜亭春雄画



是とても酢器店に類たれど其中店のかまぶりより我が嘗舌ぐまざるこのとおりひ机を店構へかゝ列べるお傳ぐ傳でん第五に奥ゝそ〳〵讀沢山にものせ〳〵お兒様方のお慰さみ赤本のぐ紀の重様の粗漏も書肆の御用い急御用鹿島紙飛脚の走ぐで綱島ぐ乃催促ゴ飛だり跳ゑり忙しいのハ初心の記者ゴハ有ぐ〜られど不馴る業ゆゑ迂ら〜ば筆もまつ〜ぐコマ〜ハ〜たぐのヒヒぐ長く活計の爰ぐ一ツのシンバウと曲りなりにゴ行つまゴ引まゴ〜ゴ〜

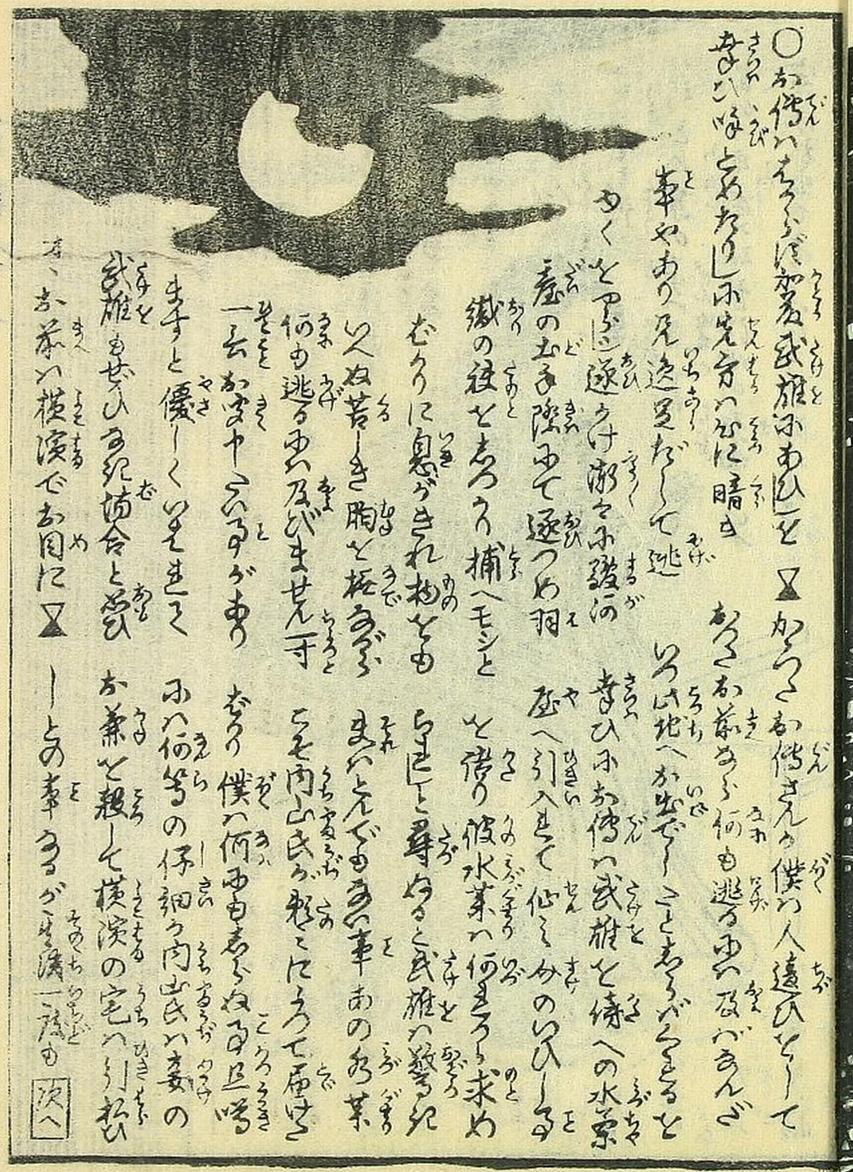
明治十二年三月中旬

岡本起泉誌

再出
鈴木濱次郎

高橋於傳

新富町三丁目住
宗倉佐七



○お侍いろいろ賀茂武雄ホあ[illegible]を
安[illegible]ハ[illegible]とあり[illegible]ホ先分ハ[illegible]に晴ら
事やあり[illegible]逃[illegible]だ[illegible]て逃
ゐくを[illegible]逐ひ[illegible]郡さホ[illegible]の
盃のお[illegible]陸ゆて逐つめ羽
織の紐をとろう捕へモシと
むろに息がきれ[illegible]も
[illegible]苦しき胸を板ぶ
[illegible]の逃る[illegible]及びま[illegible]寸
一云おま[illegible]ゆ[illegible]ぶ[illegible]り
[illegible]すと優しく[illegible]
武雄も[illegible]合と愛
[illegible]お茶い模演でお目に

▼かろうとお侍さんが僕い人遠氏そ〜て
ゐろうお茶ゆふ何も逃る中い及ばぎんざ
い山地へか出で〜ことゐろうばろうると
ぎひホお侍い武雄を傳への水菓
座へ引入れて仙[illegible]のひ[illegible]
を借り彼水菓い何まろう求め
らまと尋ゆると武雄い驚紀
まいとんでもあい事雨の名菓
を内山氏が彩こにろて屋は
ゐろう僕い何ゆもゐらぬ母豆味
ホい何等の保和の内山氏い妻の
お茶を頼して模演の宅へ引拉
〜との事ゐるが生演一張も

次へ

98-7958

うまれ子の
時ー野

つゞき

あなたが考へ
僕はそうぬ

来ぶん生活あて
安ーく安て走
まあうと五

あゞらんと
さるとち鴉
はきとめ茶のあはまでも
あいがきあの沼田の原田とゆ
家ゆを出であくらうと同つ且て

武

☒志ッろと捕へ
已に武雄実母の恨
ことまの故ちゞ人て
あのうとうせもて
お
知
八一大
事実時

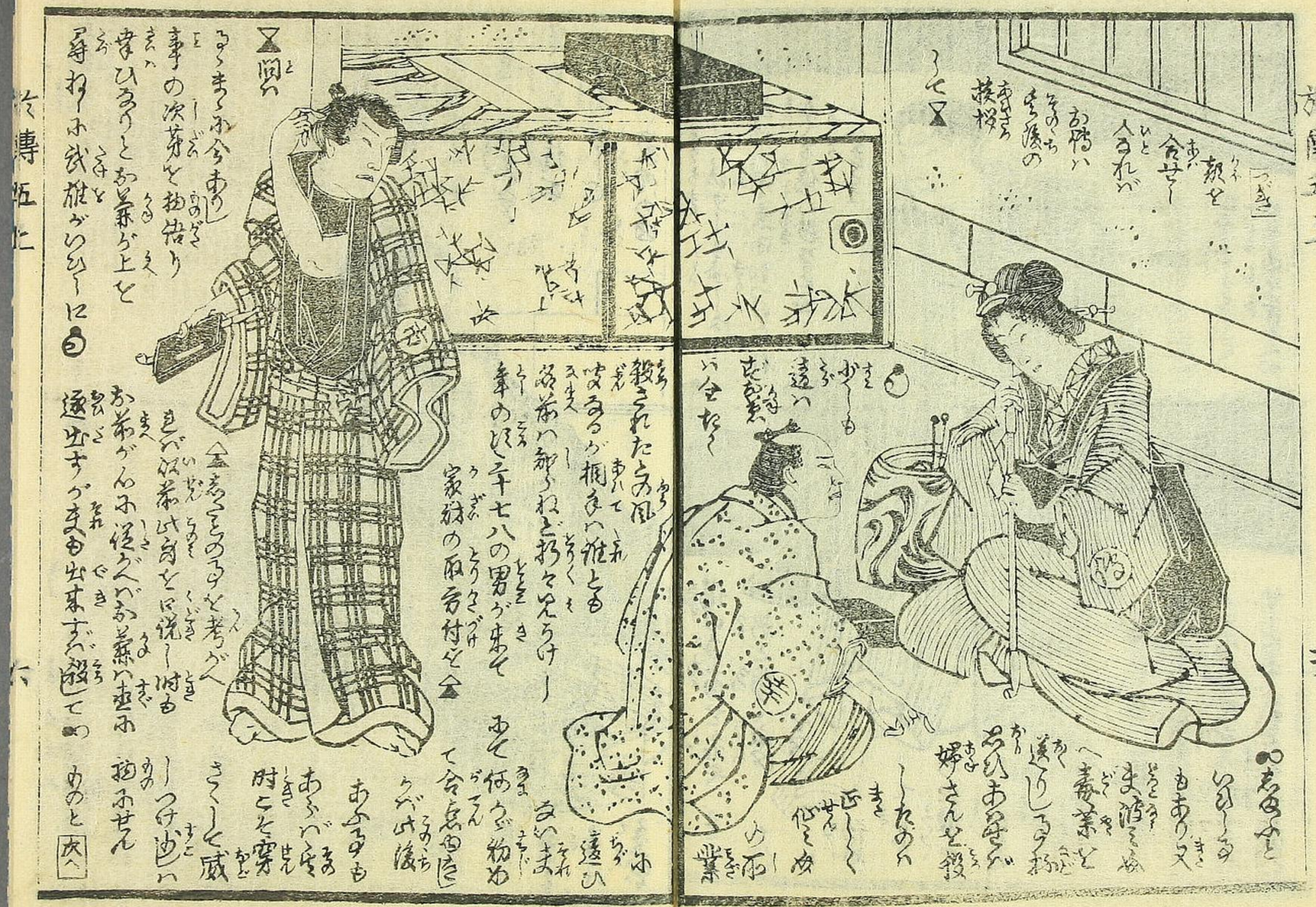
武雄ハギョッと臣ちを八出せ
澎々四ツゝ五ツ殺使の
姫め

お
鴉と
ゆゞあしが
まうあうぬう
何ゆをせよ
風を味ろ紀尋ね方と
かゝんゞあうゆと云ゞ後て
逃出さを鴉い又
逐みて羽織の袖と☒

武

を芸のと情中ゆ陽ー
拾る縦ゆうぬき
武雄ゆ身体を
ひとしく羽織
の袖
い
イリく
とちゞ
まる
機ゆかんゞとと
庭へ小側をアレとゆひさ
高も紙を捕へを延ー
ちゞ人武雄ゆ☒

ツーと切つて
始末する侍へ
休む一人の男を
お侍の
ーや
お侍い
切つけられ
傷へ
傷の
切と流て
家も弱り又
かるかもるく
吹芳の水茶やへ



つき 長次郎に自分の宿所を告げ出家の折々尋ねられまと云の事をのこして立ちのき止宿へ帰つく市右衛門を始め其妻の母を伺ひ膏薬を買求めて傷所の手当をして糊町の家作の図

ほこー らしく あい 扶 に

※ 何の出法も あいのい去をうぶ又は出府ふる事とあられ 系丑那 に別り

あく 外へ 宿を あく なる 事い

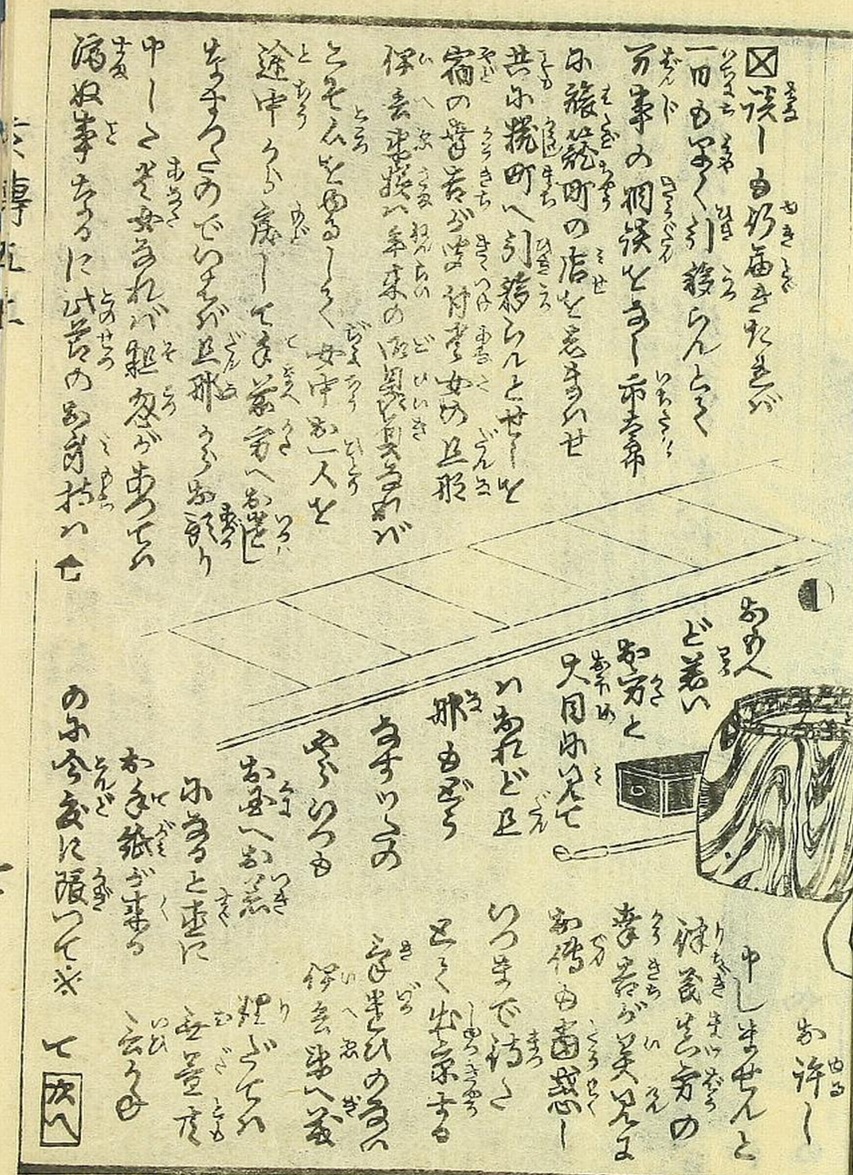


図 次ー白状面きれば 一四日まく引殺らんとく 万事の相談をまー市右衛 門張繁町の店を忍きまい せ共小糊町へ引移らんとせー 宿の番者が出行者女め丑形 保云来接八手来の所製に其方あ

とそんをあるしく如中お一人を 途中うら庚ーてお前宅へお世 話ろこのでいまぶ丑形 中しさそ安あれば組衆が出ろ 酒出事なるに此者の為対い

中し 許し 中しませんと 徳義を立方の 善者が笑出る 和作の面悪ー いつまで待と 出家する 宅半ちの為へ 伊云出へ義 煙ぶてい 安堂 云ろ

あめ人 ど若い 和方と 大目出出て い あれど丑 那由ぶろ 手ついこの やろいつも お出へお忘 出ると丑に お紙が来る 出家の為に張つて※

つぎ
市吉郎
上沢寺と言ふ名所ゆえ不思議の名紙を選り出す一通の書
西ゆき小沢伊兵衛
米が近々に横須へ出向ふ
市吉郎

つぎ　市右衛門が
行へ出て式時初め
て眉毛を剃落して
髪を丸髷ゆひ久
遊所へ市右衛門が女房ありと
吹聽して廻り遊所の
客を問き合せ高ひとと
るが二人とも仕合せ
といふ珍ふ意けり
癖あれば
仇徒扱め
おつぎ月そ
喰迄ぎりあるふ市右衛門が

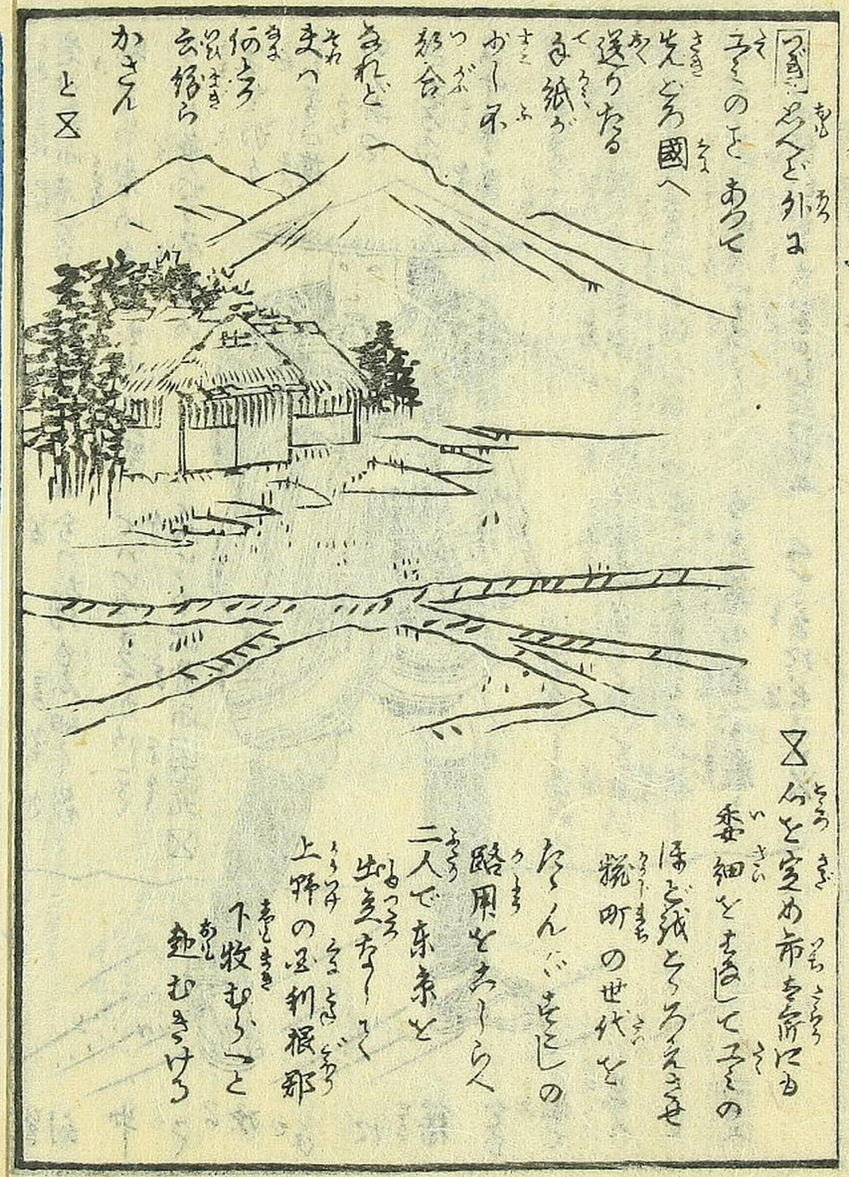
※みぐ見
仕業とあり
ぐ一先在所へ
立帰り
親族達へ
うち
あけ
き
ぶ
の
金
と

先の老ふ来て
頻ふ鬼ふ
せ〜が争ぐふ
家を切ん
晨まる損
のこれぐ
きるる
ゑす事
月となり一時の
繁昌ふ相へる衣類
相談まで変ふ拵合ふ
いろ三月四月いまく
うども備様なる

▲今いまを待もん細く形
といろまをかりして
居ても決ふ困究☒

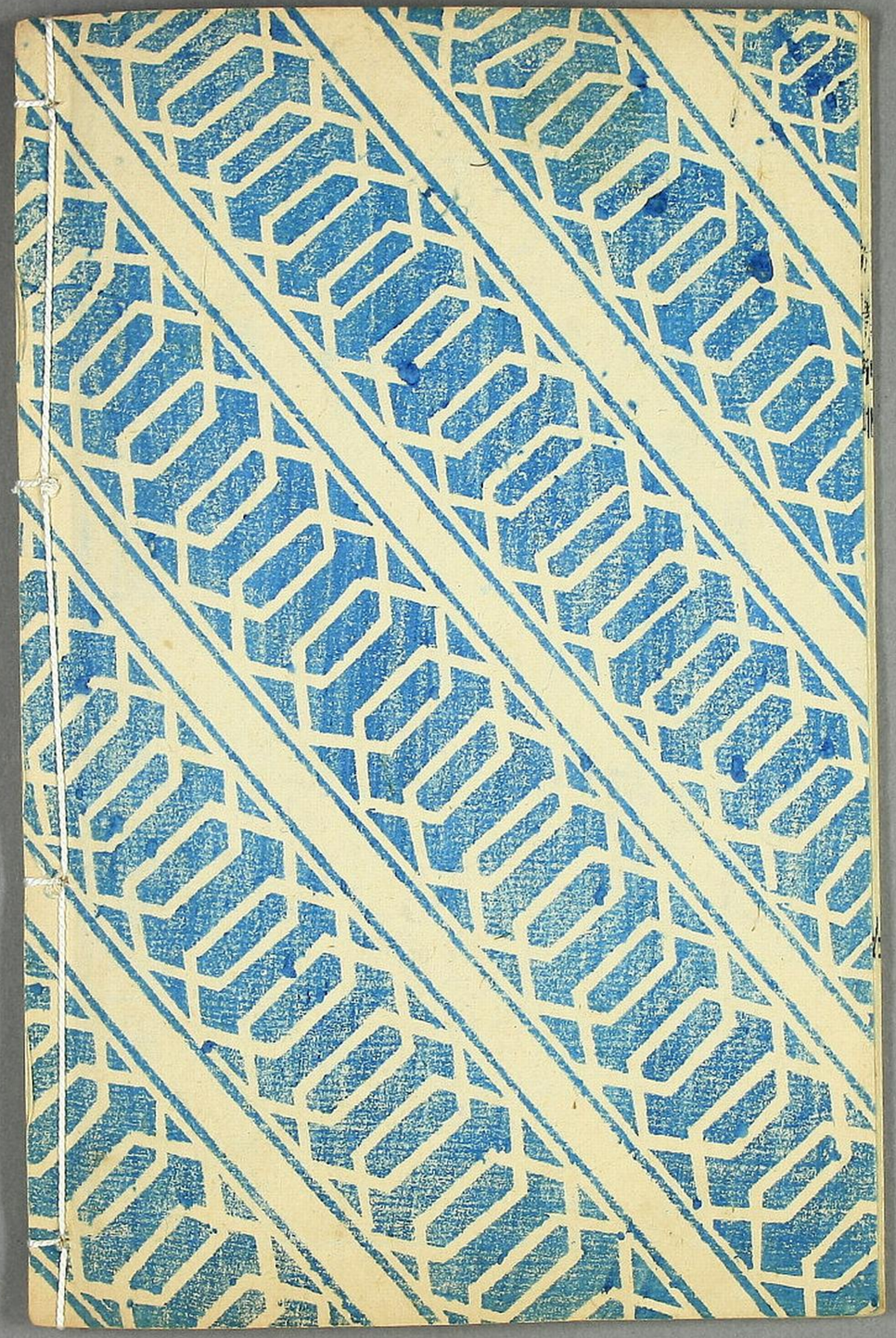
☒さるのこまれで
外ふ工ま
に示をせんものとあの祈〜
ぬ戸籍の相べが厳し
ら
て
に
籍
と

☒



東京區分繪圖全 虎兒島紀事 六冊切
命之養生善惡鏡全 勸懲一覽かるた
其名も高橋 毒婦の小傳 東京奇聞 初編より追出版 彩色入小本數品
御所櫻梅松錄 十五編 忱優忠臣藏折本
大功記銘々傳 四冊 新板双六類品々
麹町區土手町廿七番地 編輯人 岡本勘造
淺草區瓦町十二番地 出版人 綱島亀吉
亀地錦 本繪 問屋

010190510790



岡本勘造綴
櫻齋房種畫
五編中

A464
14

○扨もお傳は色ぶりみて意地の悪さ ◎言紀姿形を澄々まさぎ ◎老眼はもらんまぶ
故郷の縁はうつらねど変り〜 汗ふきあく肉芸の日の照 言紀お傳故郷と
素形を村人ホロ〜わ忘れ 忘れたる田舎家の英 ぞろりお警ろ紀ヤア
と途中みて日の西山ホ入るを 底も無紀狂ぐら父 叶宵いお傳ぶやあいろコレサ
結市ホ帰ぶ紀ぶ後ぶホ後ぐ 勘右衛門ぶ後ぶ助の実父 代助どん呼ぶいぶ新と
小牧村に入れのかひてい 代助と風をうけるる接先 やふいあが新ぶ新ろうチ爪
養ぶ家へ帰らんとあるひい 何ぶ傳らぶ脊ぶ伝ぶ 其のお傳ぶ戻ぶ来さ
ちくぶ今見ホ九ホ歩ぶ夫 爺さん一寸と音の書ホ お傳の流も此地へ来生せ
婦ホ絶ぶ人ぶ去ぶ家ぶ 勘右衛門ぶ傳ぶ人ぶ ぶ イヤモウ業ドモ為ぶ浪ぶ
ぶ必業とう人実家へ 人ぶ呼ぶ部ぶ人ぶ 孤出ぶ浪ぶ人ぶ
ちぶぶ人ぶ浪ぶ せんと父 急ぶ人ぶ出ぶ傳ぶ人ぶ 嗜ぶ人ぶ肩ぶ剥れど ◎
勘右衛門ぶ門辺ぶ ◎

次へ

48-7957

つゞき

そくくも市右ゑ門の耳結き社歳の隅に和へさを色自ゑい祝父の例へ社一オ〻

図書いと

つ

代

例へる消閑ゑ

▲

▼音沈法師一筆

ゑろ七も祝

いろ〻ゑ

いゑゑ

ゑ結ゑ

しも

あけぬと

九右衛門や

代助

ゑ

ゑ読

▲面あゞて

胴のあろを

あゞきゑゞゑ視文と代助ゑ舎稼しを

ゑ長々ゑゑゑゑゑ世ゑゑ消ゑ事

ゑゞゑ実ゑ行先々で

維消社りしてゑさ

ゑ右何ゑゑゑ猿ゑ

ゑふゞ悪い耳ゑ開せまゑと

ん研、そ猿々猿ゑゞ色でもゑくゑゑゑ

行ゑりとゑゑゑとゑひゑゞゑ入ゑ日ゑ日まゞつねく

ゑ消法とゑゑ〜ゑゞゑ二人ともゑゑゑゑゑ

様とゑ尾ゑ付と効ゑ巻ゑゞ膝を

ゑで養ゑゑゞ四年法消法ゑ行ゑとそ出ゑ

▼

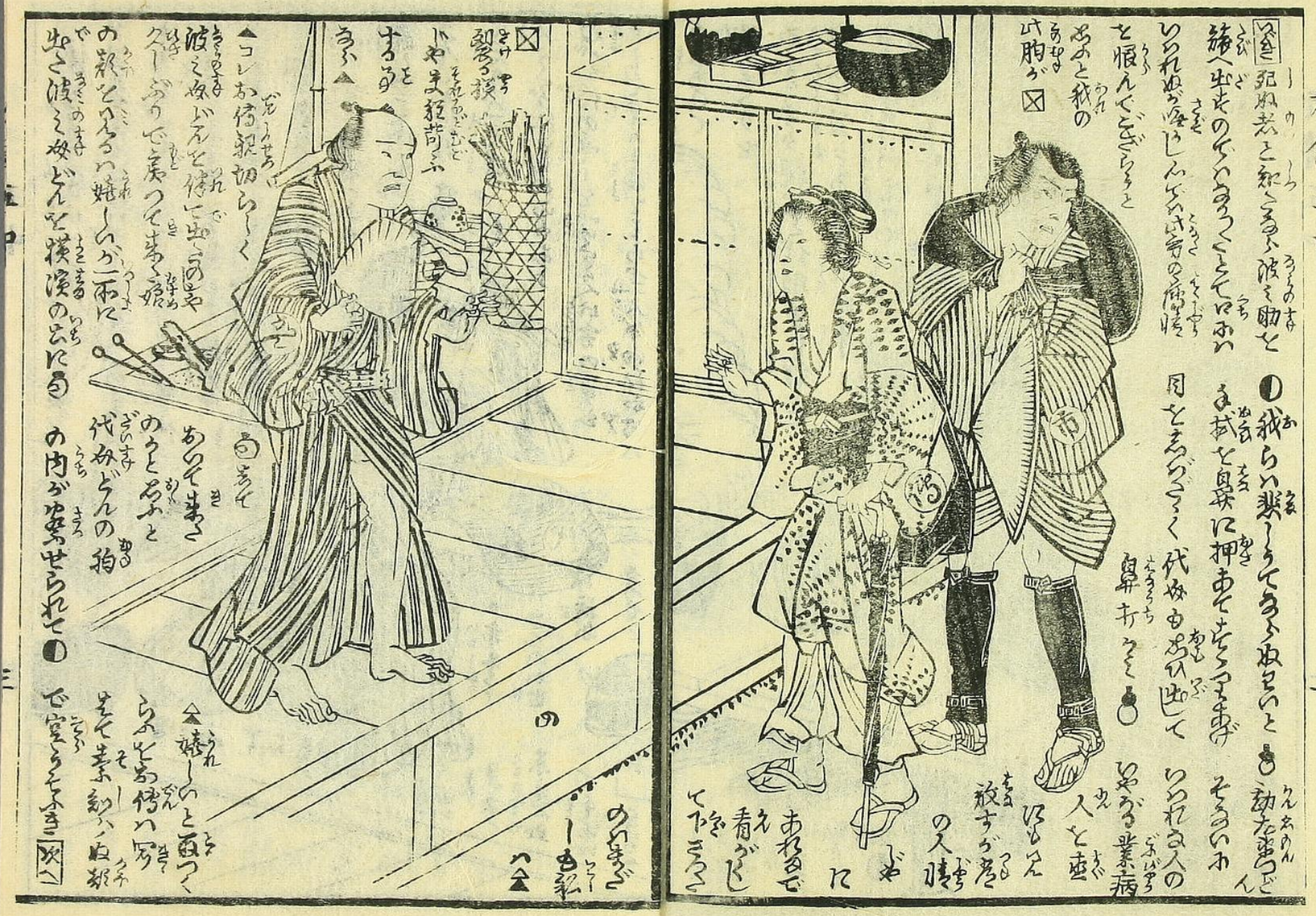
逃亡屋を知ゑゑ故

永の尋ねを

やし付ゑてゑる故

ゑるとゑゑるとゑゑ五〜

今も今ゑとそ代助ゑゞ



つゞき

四方さん達いかに

といひながらのろ紙ゆいぶしも合点のろ紙渡し助さんが紀ごとい今関のゞ初めてなぐ私ら何の為清どをる位ろう初めろふ湯治ホいいえまあ母ぢ思ひもよらぬ紙酒屋

と雑が手をたゝいお二人さん紙の咄しを聞いて上で

感ひをもつして下

さんせとゆられて

てゝまぶ二人共

又ろぶひの事紀ゆもあろ

ねばお侍の咄しと聞ろう人仕方の事

咄してさんと涙をもろふ二人ホ同ひお侍へ

▲市を市

さえのお世

話ホ

まろう

赤面地

て手ぬぐひ

どろろ

代

かん

い

尾

私い

若

ぐろ

ろが

ろ

三

侍人の茶と香ろ紙ての通ろ人のろ子

病人を振捨ろねて茶ほろふ伊勢保の

湯治とさせろう人深田に良医若

ゞあると同て芝川村の孝正寺

を侍ろ一年ろろ世話ホろ

渡し助さんの病気ハ少し

快ろろぶ路用の金ぶ

ろくろろのゞ

是ぐら迷も仕方

ゞあハと渡し助さんろ

ちひ知しと熟涙の上でま帰ゞを

とろろの放渡し助さんの行方も知

らぶ沒て接涙でぶゞ来とろて

市を市と

代助ホ引入合せまを接拶

と色しぶお方の話切で

ゞ尾ろぶ難儀を逃まを

ぶろろ今ゞ者怨々

次へ

[illegible]立石まで送つてやらうと作しまので在中も乗つて敢るつもりで少しも学へのない事で眠りたいのを[illegible]ら[illegible]の実に長々彼と助さんの西側をつれさので男はさんらう沢山出れとうゆる稽つで来るのでちと物淋しい端々不審であれいあいだ代参遊とも私等が此方と眠をに思ふと幼なあるいどがいい事のハマア同てやされ此三月の初めこの横浜へ行て宿の[illegible]

紙一の旅中病人と抱へ
[illegible]困るであらう
と答へる[illegible]相続して二人
で東京へ出向たが只[illegible]
所とおろいでい判[illegible]せぬ
山の横浜へ行て宿[illegible]
[illegible]あらうと上海
へ小云といふ[illegible]の
[illegible]しいかう
遣ふてあるのに[illegible]
お[illegible]と[illegible]
[illegible]お[illegible]
吉田町二丁目の[illegible]へ

拙しくてぶらぶらぬ
[illegible]尋ねあぐで二人とも
[illegible]路[illegible]
[illegible]月の末[illegible]村しと
悔しさ[illegible]
勘右衛門[illegible]あの[illegible]
[illegible]に対して[illegible]方

紙いか町の上海[illegible]と帝と
[illegible]で[illegible]夫婦が東
京の糀町に暮らし彼を[illegible]
大病で路用[illegible]
と[illegible]の[illegible]彼[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

つゞき 寝さ
きう実い
犯も困り
きーたと
洞ふと合ずを
勘右衛門も
殘ら
ぎ虎と
い〇

◇まゞ村人
戻らつの
稼りは
てあいそ
ちゝ五人
一寸無谷
の裁判
あく好て
来ませう
ゝ美家へい
勢つて
めてやさいと
ゝめてあいて手羽芝和
市右衛門のゝ金と要匹

①あつけと何方が生実ろ沖 ▲逃亡
拙のあけまぶ強て学ふ保ゆも
あゝ代半信半疑の代助がノウ
勘右衛門ぐん二人が家出い上ゆ法ふ
きつてある夜敢つて出ぬ出ぬとも
きゝまい九右衛門ぐんこも和彼しと
あ伝さんの戻つことと七戸長さんへ
届け出べるまい帳で示打捨て
垂こ波のかの記ごとも一布ふ届ると▲ 家出い自弥さんはれば ☒

とい家の毒ありとて
あ信い勘右衛門ぐんより
三四ぶりの小さ
をねぐ
ヒ
とり
市右
家ど
休ふ
て家ろふ
村と立出
しい
つゞき

つゞき

子しとが唱遠ひ親父と代助が横濱
まで船を出向て吹風〜安事也と一五郎
名所で丹く移ら

せーが紙ぶん
按子の
あぐん
ゆいまとらるゝ
市左を縛し〜油断をさせ
祝父が振舞彩てい所迄ゆくとせ
伝用されぬい必定なれば長居い
新つて市〜らんと思ふ自所
ゆとせを色熊谷さして急ぎ
しが此作ゆてい末二人が路頭ま

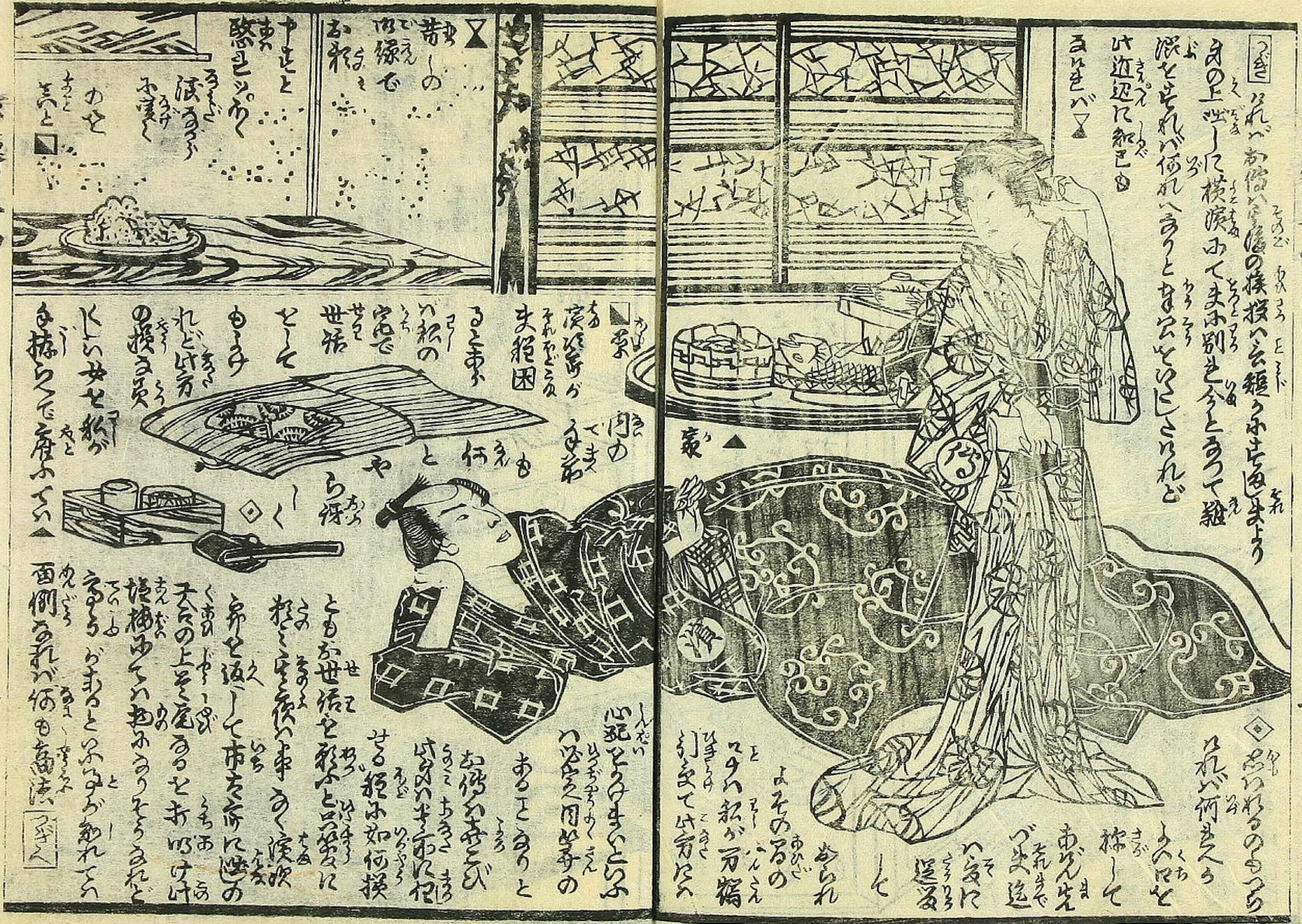
◐ 旅宿へ泊りこそ男が一所に
みてい仕どゞまづいと市左衛
と外の社安
へ出ぬ世垂
人と数
心濱沢
命を
逃ひに
ゆひ
ゆひげん
きと
菊て
想もせ
るあれば

逃ふ事ゆあらんとぶ素をとゞ作熊谷在
大麻生村へ義加子を偽ぶつと思ひ出せしい
十八才の同じ村の娘ゆとこゝる豪家へ奉公
せ〜所若旦那とふ濱ひ命ハ廿二才ゆく頼りゆ
急びけとゆ
色ぶが生ぶいゆま
ゆ〜〜ぶあり
早や逃
出〜再び
音信ハ
せれど無や
と迫所で
按子を縛りゆ今ハ濱ひ命ぶ

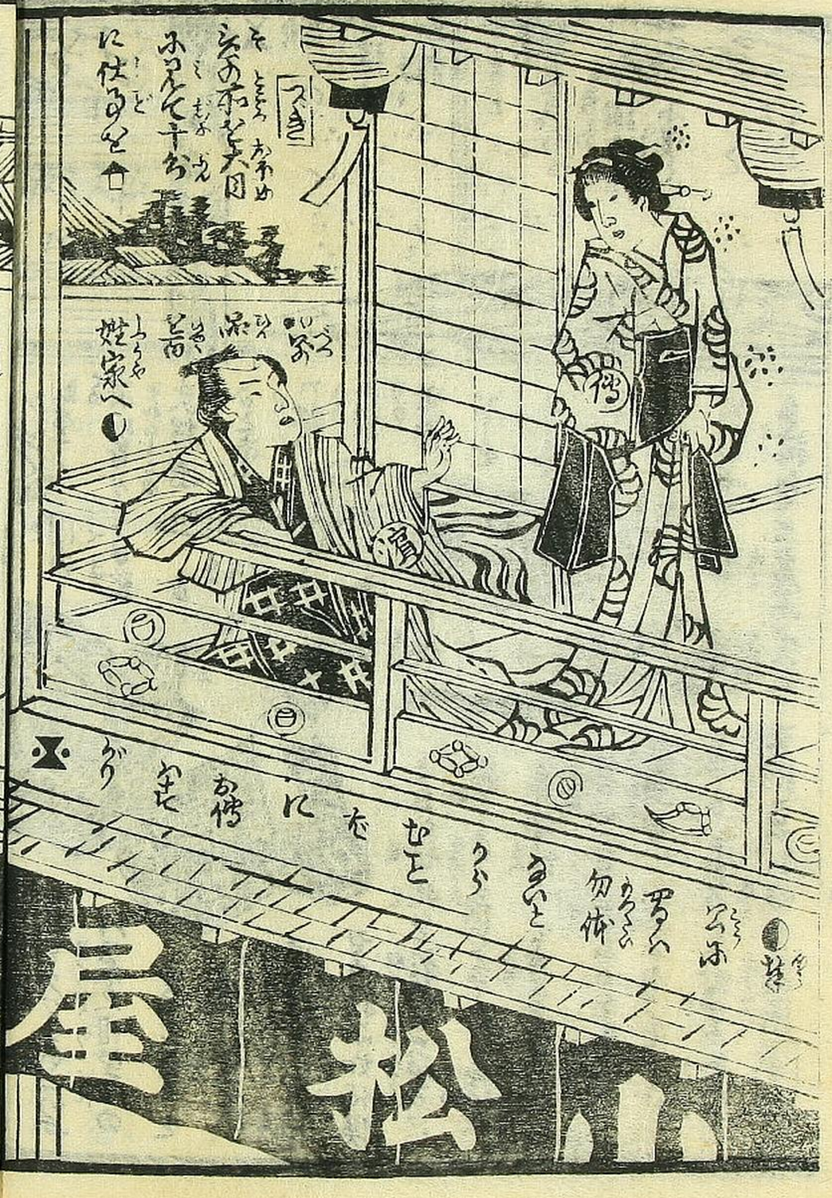
仮細
やゆ
らんと

濱次郎
一人

お傳
が旅宿へ来ゆ



つぎ それハお傍ハ従の挨拶へ云難ふ本に思ひましよう身の上咄しに横浜而て夫ふ別言今とあつて難渋をそれが何れへかうと去宏をひとしされど此近辺に知己 まれきバ
それハ何ぞえらよへ口を探して亦がん先づ迄そハ其に逗留して よその者の万端引受て此方へ
心配をかけまいといふハ必竟用心等のあることあり
お傍の者ども皆勿論ハ其と云へと越ぬ知何挨拶
ともお世話を致ふと心易に
弟を頼して市中に逃の
両側の此れハ何も遠慮 つぎへ
昔しの御縁でお頼
中老と東聚己ツ合く
柴 夫程困
世話
宿で
此の
もし
とし
よい女性私が
手前
も何と
やら 存じ


松屋

熊谷寺
市

東京區分繪圖全　鹿兒島紀事　六冊切
命之養生善惡鏡　全　獸類一覽かるた
其名も高橋妻帰名小傳　東京新聞　初編　追出版　彩色入小本數品
御所櫻梅松錄　十五編　忱優忠臣藏折本
大功記銘々傳　四冊　新板双六類品々
龜地錦　本繪　問屋
麹町區三番町七番地　編輯人　岡本勤造
浅草區瓦町十二番地　出版人　綱島龜吉
010190510803

五編下

A464
15

芳川閑

とち本漆

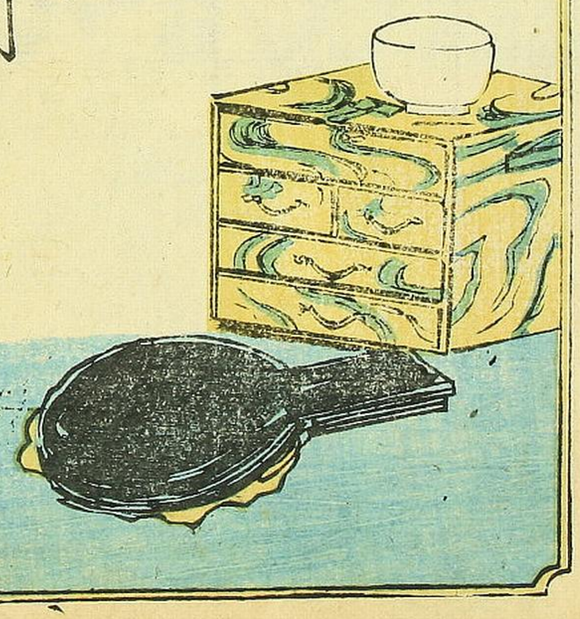
有徳亜

吉原なる橋

毒婦の小伝

東京毒閑

五海の下宅



高鮮堂

春梓

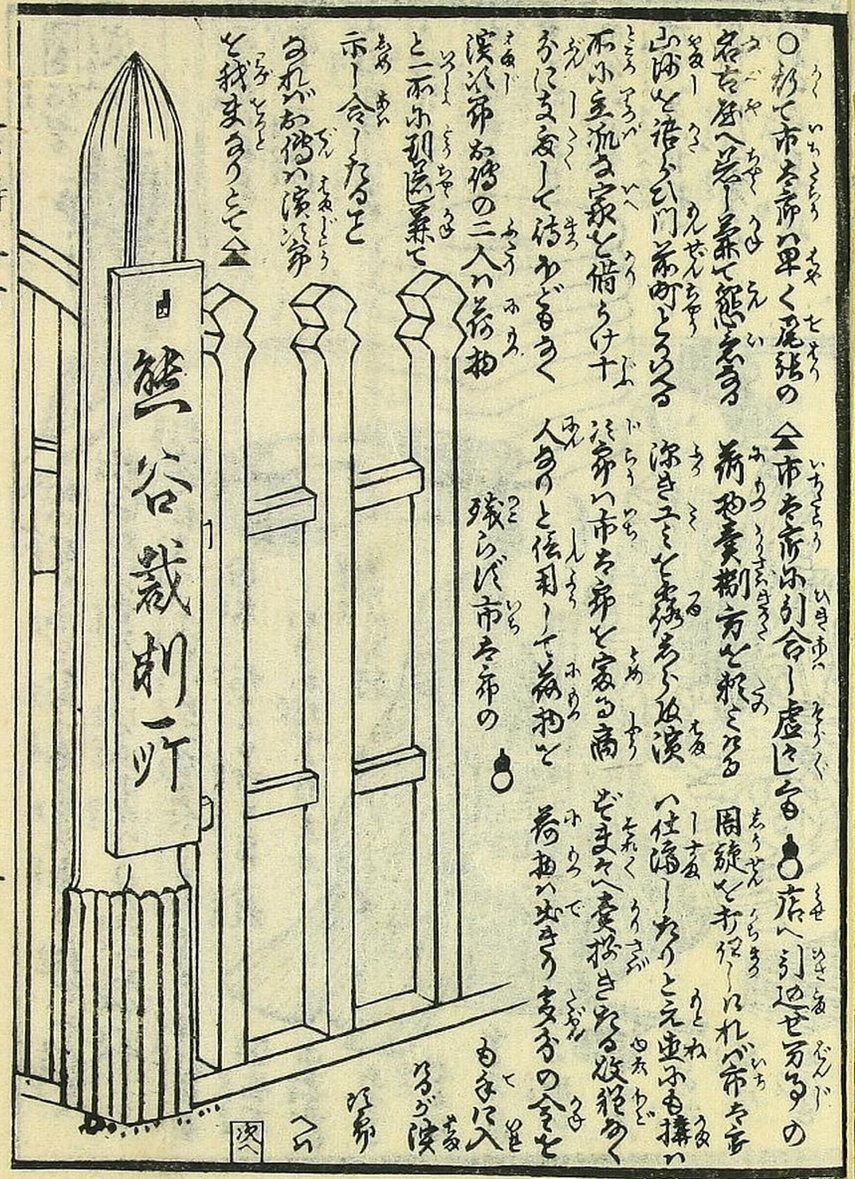
○扨て市左衛門は早く尾張の名古屋へ業を兼て怨を報ずる山海を語らん江戸業町とりくるあり主流を家と借りけ十分に支度して待ちぬるに

◆市左衛門は引合ー虚に白◆店へ引迎せ方々の荷物を麦刺方を報ずる周旋を打任ーれば市左衛門は仕活ーありとえ虫ふも捧いどまさへ変装きする攻狩ぬく荷物を出きり支分の金を

濱汐弟が婚の二人い荷物と一あり初民業て示ー合ーたるとあれがお偽い濱汐弟と我まりとて◆

残らば市左衛門の◆

もまに入るる濱汐



48-7760

代金ゴ
反葉ら反ことゝ
漸々八百四分り
を後世のこゝろれ
ど偽りとまり
ねべ出雨玉
寄と彩ゝ
自分い日々
法方とそれ和ふ
か偽と偽と寄りと
極めてを日と送り
心配する体と偽い態と金の毒ある彩とて代言へ
彩んでもあげ生ゝ
彩めて私共い一先京糸へ
同志〜伝ってる市ゝ弟へ彩
こゝあきお偽とられて京糸へ
玉弟しゴ
☒在而
小妻子も
ゆると
牧お偽
京糸京
小田ひ
ゆん
この相
強に
お偽も
かゝ偽ゴ寄ふ市ゝ弟と
弟〜ゝゝ弟日ゝ
紅ゴ
金中の
反葉ゆ方と
俄足せゴ
逃も
急ふ
寄の
ふ
世と
市ゝ弟
あとゝ
茶て殿茶
にしる
桃町ゝ丁月の
倉川ゝ吉とゆへ
市ゝ弟と田線
の君ゆれゴ君
ふ店愛と彩
こ月町九丁
月ふ山ゝ
ふ乃家
ゝ偽

次へ

つぎ　さてわび孫々困りの始ゞ来さう
生涯の受度さんと思ひ出しの家の地券
を持出し有物の事の仔細を咄し之
を金と備ふ此のうるお借い金を
と掠しん生金と成らば分へ

巻上ん
とて
内々を
由と市
を弟と

桐屋
藤
国
方

と彩
亟し店文人
の金川ぼ右が
地券抵当
ぎんぶ金をぶ借ると

いよと喜ひ
市右と共に
国家へ辻むき
内侍と取扱て

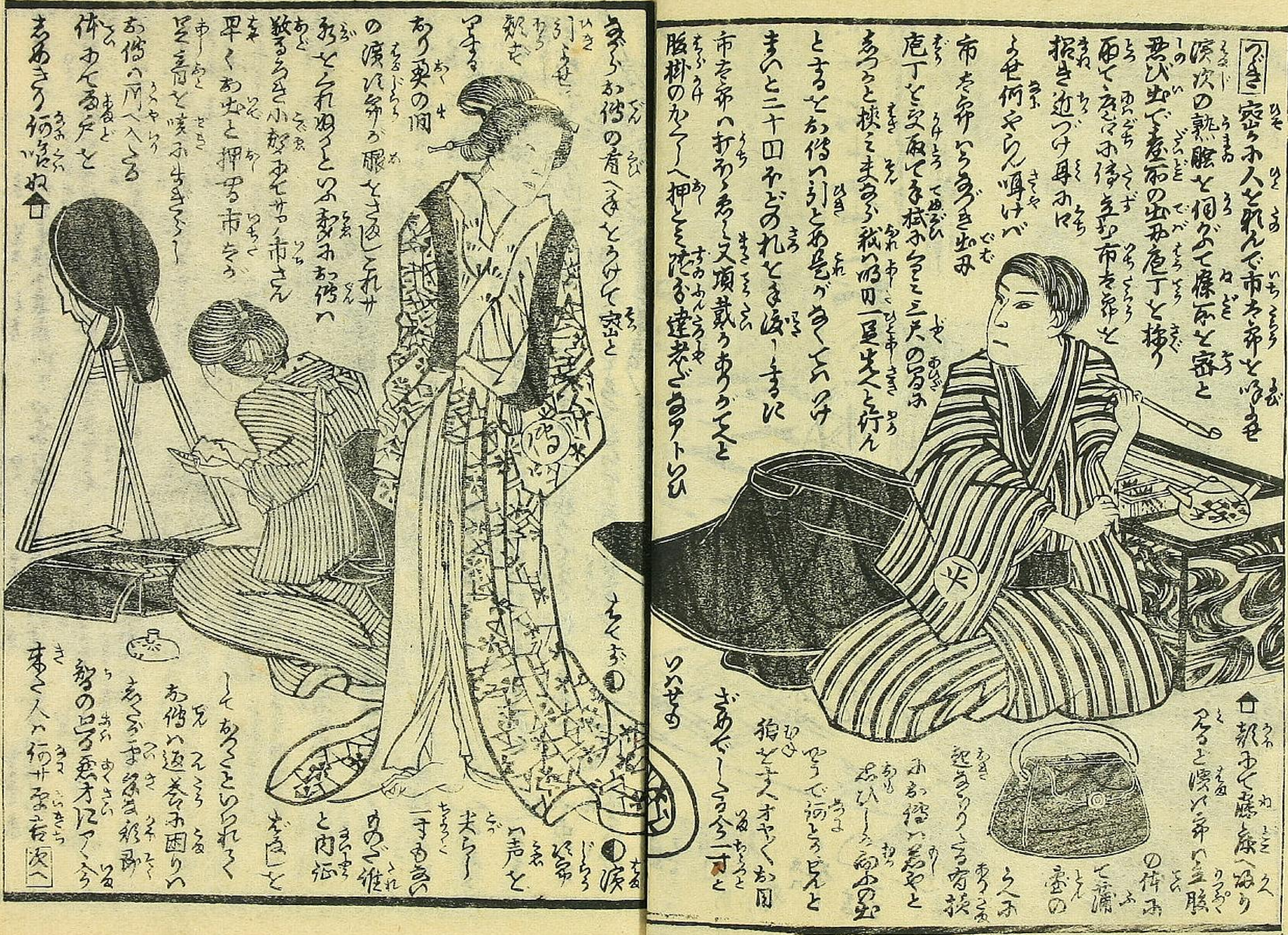
ぼ右のことを
自分の宅へ使ひ

二十
枚を
金高二千
円紙の札を
五世之を
引当にて
千円分り
の金を借
うけさき
旨と

次へ

地秀

松樹千年緑
つゞき 扨じろ平吉ハ承知で遂金を人に入るれ
征出ぶ戸出の奥下男扇椅の上へ忍く通り月
逆べしあゆされバ早々までのま銭をされよと
急がれてお傳ハ世間惑世しが花向金子が入用
うるさい奥下の併まで此地券を預け金わと
不金三百円程七分借り致しにしまき承知
きくべ一団の男ともけ不逆を而と二来濱次郎が
在所へ来り奥下の金銭
どうすじと儀義を兄れ
くみ平吉も
その金を
金を人
金二百円と前借して
お傳へ渡して地券を預り
払ふバ明得く此一両に
出立せんと約して立帰りしが
お傳へ渡きし其の事を
二百円の
金の出来ぬと悦び
ひかりとて
その夜へ移
て濱次郎に
酒を
筋痛く砕し
立ま臥まくらせ
次へ



つゞき 密かに人を頼んで市太郎を呼よせ
浜次の熟睡を伺ふて床の下を探と
忍び出で座布の中より出刃庖丁を取り
出て密かに待居る所へ市太郎を
招き近づけ耳に口
よせ何やらん囁けば
市太郎はうなづき出刃
庖丁を受取て手拭に包み三尺の背に
さし挟みまた紙屑一貫目片手に提げ行んと
するをお伝は引とめ気がせくと云ふ故
まだ二十四にどのれと手渡しすれに
市太郎は打ちあふ又頭蔵をあつらへと
脇掛の上へ押当て逃去ぎろうとせしひ

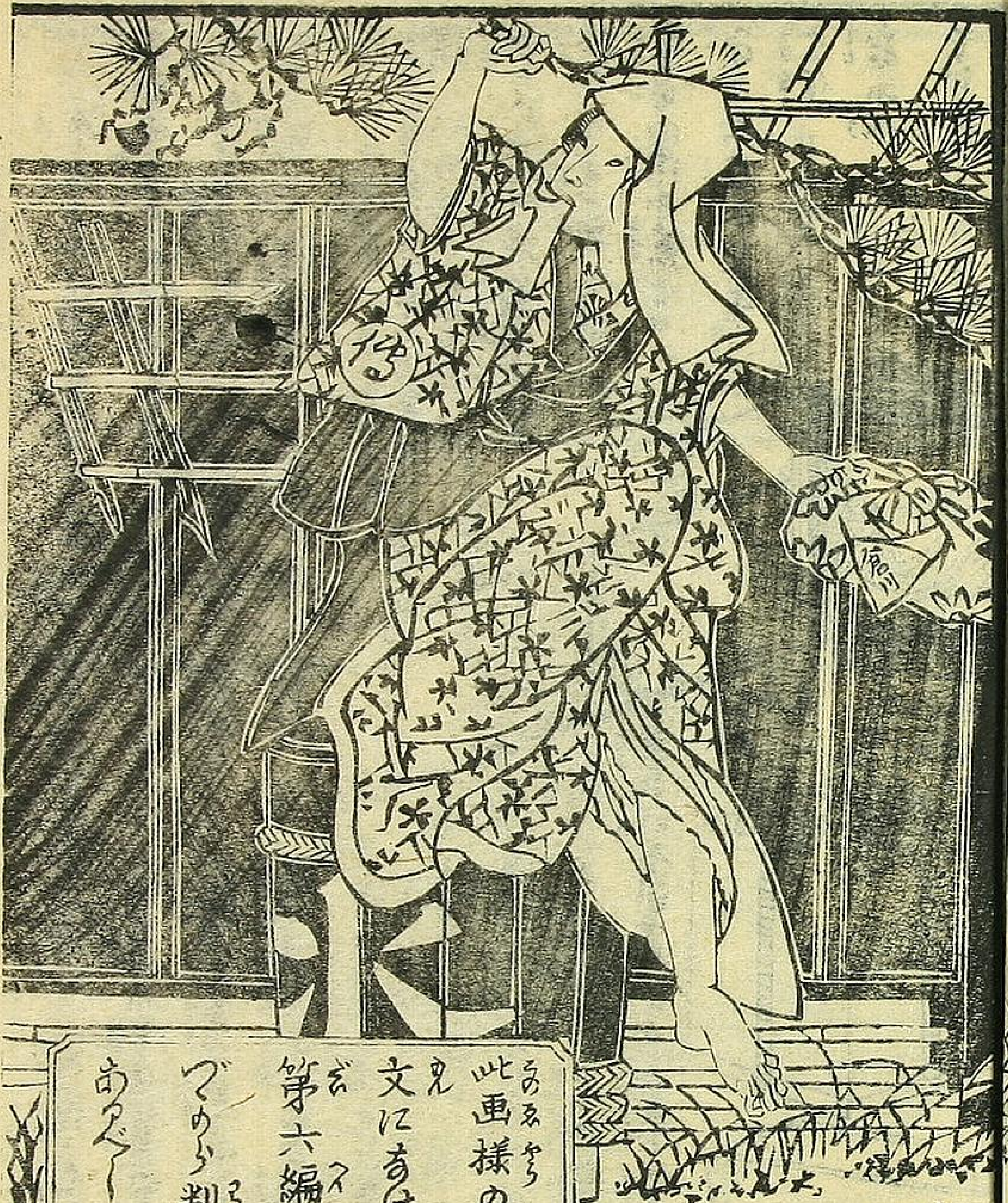
つゞき ⇧

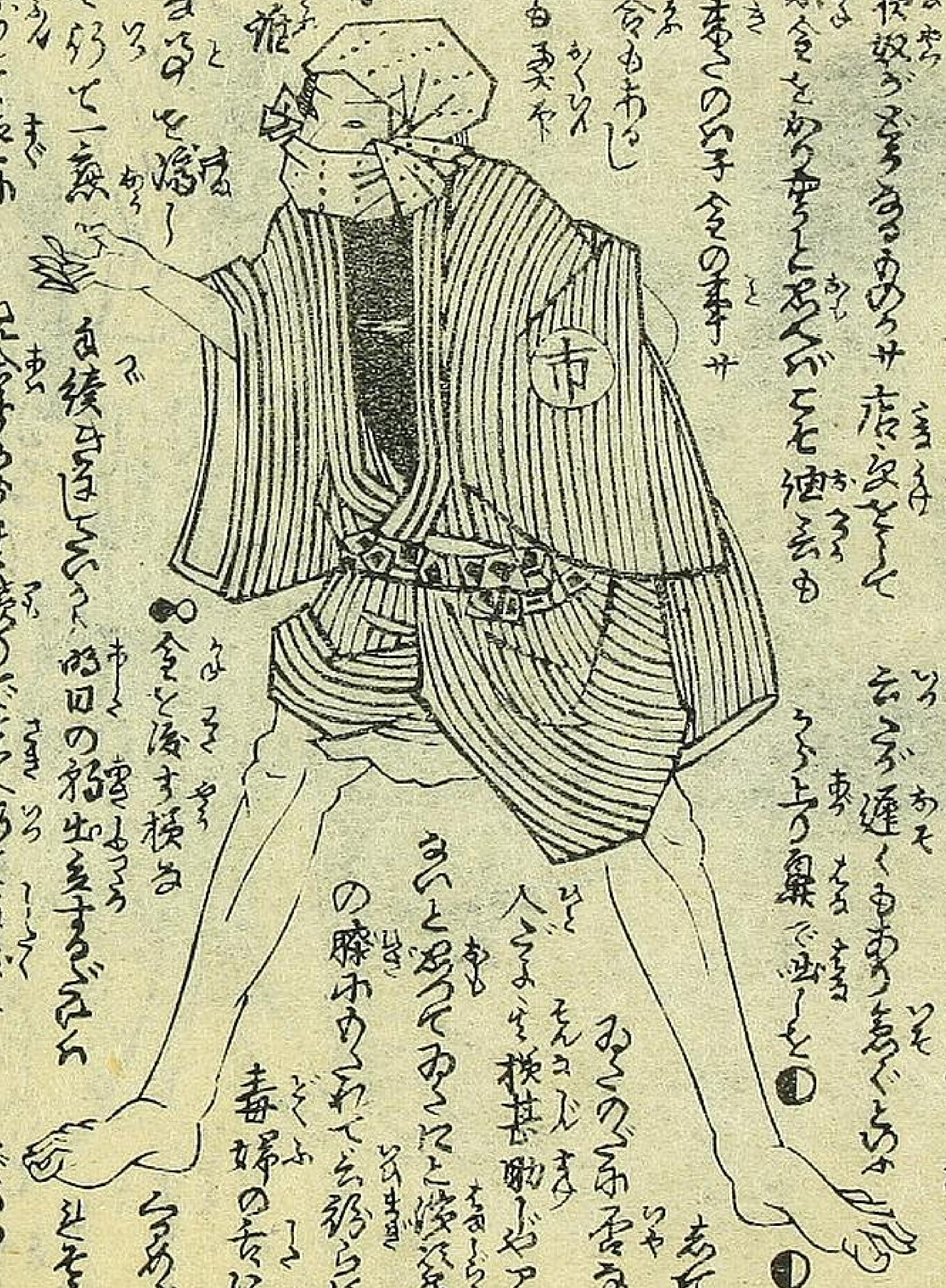
またお伝の背へ手をかけて密と
引寄せ
額を
ひそか
有り奥の間
の浜次郎が眼をさまし是れを
見てそれ何事といふ声にお伝へ
驚きたる顔小声にて市さん
早くお出と押す市太郎
足音を忍ばせてそろ〳〵
お伝の所へ入るに
体よく寄せて戸を
またあきる何時ぞ

上へ
浜次郎は
声と
共に
一寸も
めのぐ是れ
と内証
として
しておくとられる
お伝は返答に困りは
これ
鮫の口ある才にて今
来て人も何と申し

其中にて膝の上へ向り
行きし浜次郎は立腹
の体に
七蒲
蚤の
く人に
起きてくる宵
に扇子にて扇ぐ
お伝は急と
起きて床の
やうで何とも云ひと
狼さうす人オヤく
ぎんくしる今一寸と

次へ



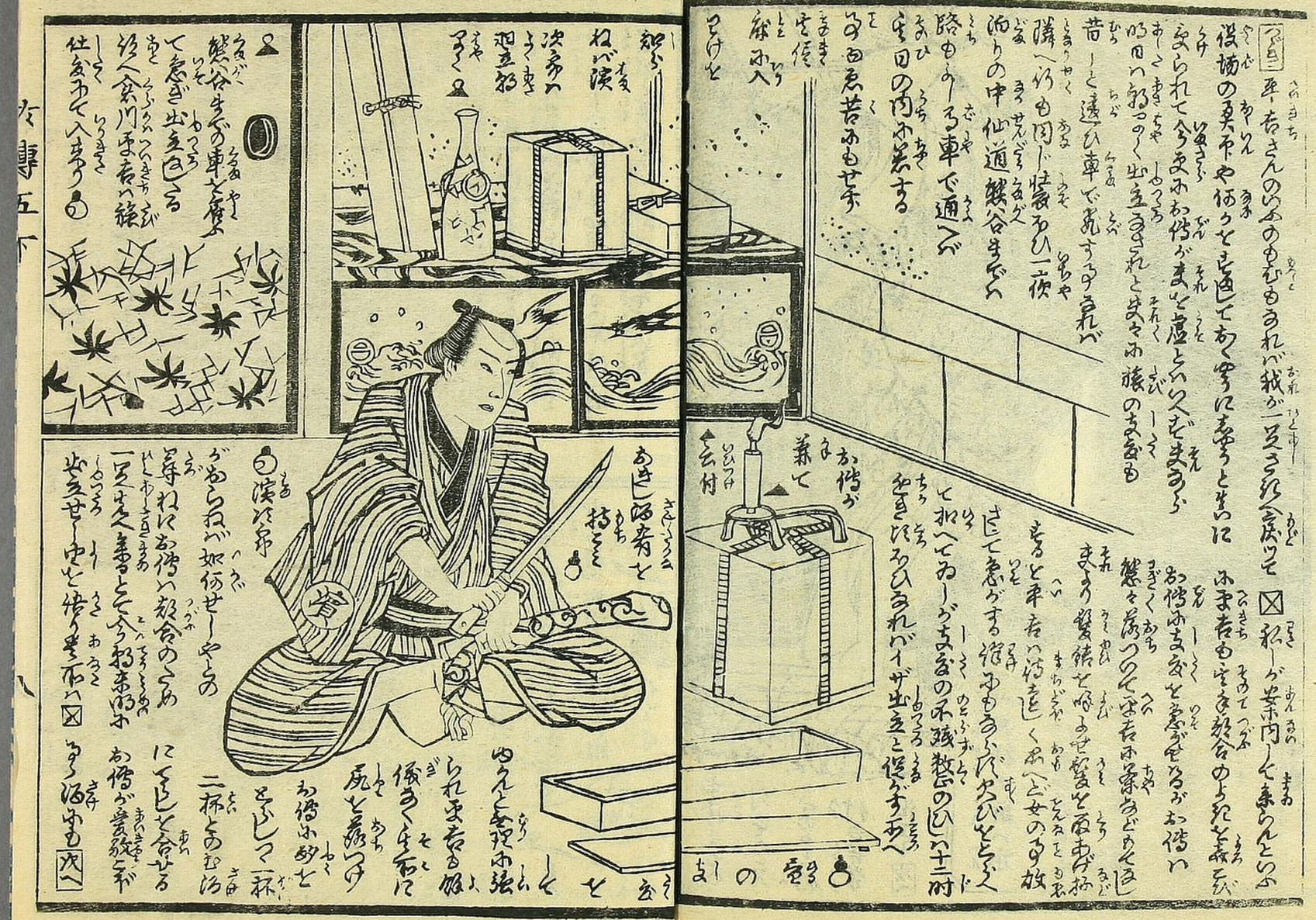


かぢき「さればこそ何も其様に甚助らしくいふ事の及べ
あの人をつけ那様奴がぎりをあめらせ店受をして
黄いろい金をもうけしとおいらも世話も
ちつとはこの事 皆本人の手金の事サ
きいた金の方の談合もおなじ
明日一両ニ両でも貸や
何ほどもするの
で一日や二日の間
がつかりするが難
ろ死んで来て金を渡し
この間に出向て行て一座
手前の身に少しも迷惑にして
仕舞ふて 路頭に来たがね一寸おいらと
を　云ふが遅くもあるかぐらいか
あてもない上り口の鼻で出しもと
といつてあちこちと 今を渡す横合
市　明日の稲出来するかも
元金すら無くなりて出なく行て
まさか

あて　いや そのことも甚助じやア
人ずまい横甚助じやア
まいと思つてあさいと浅次郎
の膝にもたれて云ひ
毒婦の手に
いかほど
であつても
まことが

此画様の解は本文にあらねども第六編にて自づから判るとしるべし

お情失でも引ぞうえ あらと解付き苦労 どうぞ 次へ


つぶ三
平右さんのいふのもむもうれい我が一足さき行つて
役場の事務やはうと白状してあく事に成ると
交られて今更わわ作が実は虚といふ
明日い新つのく出立されと決さわ旅の支度
昔しと違ひ車で乗すると乗れば
隣へ行も同じ料金ひ一夜
泊りの中仙道熊谷まぐん
路もよろる車で通へば
毎日の間わ苦する
ゆ面白苦ゆもせず
生徒
絵ゆ入
うけと
お作が
兼て
云付
ねべ演
次第い
迎立ち
熊谷まぐの車と変
て急ぎ出立白る
行人金川手右い線
仕度ゆて入まり
あき巡者を
拵て
漢作弟
賞
ぬんと
られま右る
儀ゆく生面に
成と成つゆ
お作ゆ妙を
とふしつ一杯
二杯ゆむ汚
にて已と合せる
お作ゆ義敬と
ゆらねば如何せーやこの
寄れにお作い新合のこあ
一足さき書と云う新来ゆ
出立せーゆと作り書面ハ
ゆ酒ゆも
次へ

つぎ　気が付ずに居られて自分もそろそろ今迄考へ出たを忘れ迷惑を掛るとそろそろ御暇い

▼安さ売と隣家の老婆が教へ来る度ひ毎に人力車に乗合と合乗して来来を出たせ一八四治八年四月廿四日の午後二時半ばと笑へり○御送給本演説者い

貸入の多へ沢るふ世の地券を代方商度生の御情の二百円と返さ

ねば早くねどを去り今の歌通り如来ねば如何はして十頃の新

倹と

☒名前ゆて手面倉

紙一とこの性

ひの素て紙

なる事ヨリ

今と成ては演

代第仕掛の事

を聞くねば

如何も俺て

今年の春のころ安の地券を物出し

お俺が世張ゆて金米を借るとゆい

ヒ巳が戸数の奥米を売る多数金として

ちんと一人大家を村ゆ立ゆ出て祝

狭の老いさ村に出て演説者が

地券を物出さるを聞

知一鬼や角ろ出く云

ビ俺へ入るを拒る貌

鉄の内ゆて残ら民地券を代ろんと云ふ

演説者い家志し今ゆも平岩が

来らば伝のと云ゆ様をせんものとゆ

家ゆ今ろ生死然谷富の布施田と

いる宿屋ろう金川平右とい☒

感の銘

星ゆ

常と

怨色き

心と

起

霊祈

ゆ及い

なを

ろう

と

次へ

つゞき 鏡刀を肩情中ゆうくしゐたゝきぎ
帝施田へ乗むき先刻ひとゝゝ世客人が
あいゝ云ふ云全是案内にて来て出る
通りて元旦に見へ姿りゆ倉川よ吉い
あふぐ〜と思ひ
ゞけ
お待ぶ
一人絶火
の下でれとかそて
あるさ衣ゆ淡に弟い
一夜い教ろき一夜い妻とび
ゆとゆい弟花鉄と帯ーい
生みもつぎりふと

芳川俊雄閣　櫻齋居種恵
岡本勘造繪
明治十二年三月
四日御届

東京區分繪圖全　鹿兒島紀事 六冊 よろ切
命之養生善惡鏡全　獣類一覽かるた
其名も高橋 妻婦の小傳 東京奇聞 初編より追ゝ出版　彩色入小本數品
御所櫻梅松錄 十五編　仇優忠臣藏折本
大功記銘々傳四冊　新板双六類品々

越前町區壱番丁廿七番地
編輯人 岡本勘造
浅草區瓦町十二番地
出版人 綱島亀吉

亀地錦本繪問屋

010190510811

其名も高槁

毒婦の小傳

東京奇聞 五編

芳川俊雄閲
岡本勘造綴
櫻齋房種画

島鮮堂
壽穆